

認知症及び認知症が疑われる 知的障害者に有効な支援とは ーライフストーリーワークの実践を通してー

国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
認知症ケアチーム 堀川 慶太

ライフストーリーワークとは

家庭の事情で児童養護施設や里親のもとで暮してきた子供が、過去を整理し、未来へとつなぐ取り組み

→ 自分史づくり

bild

Life story books
for people with learning disabilities
a practical guide
Loren Hewitt



①情報収集

- 利用者に関する資料を探す。
- 可能であれば家族からも情報提供していただく
- 関係職員に、利用者の好きな物や過去のエピソードを聞く。

②ワーク方法の選定（計画）

好みやコード、理解力にあわせ、ワーク内容を決定。
例) ●ポスター、●アルバム、●メモリーボックス、●映像（PC）、など、利用者が参加しやすいよう工夫する。

③実践

利用者の体調や状況に配慮しながら、ワークの実践を行う。

その際、あまり反応がなかった場合でも、取り組む時間を変えたり、あるいは反応が見られなかった場面と異なる環境で行うなど、利用者が集中できるよう、意識が向くように行う。

- 利用者自身がライフストーリーブックに何を含みたいのかを議論し、決定する。
- コミュニケーションの理解力、表現力がある人であれば自らの思いを口頭で伝えることができるが、言語で伝えることができない人であれば、利用者が身体的に表す感情的な反応（表情や動き）を参考にして、ライフストーリーブックに含みたい内容を決定。

過去に取り組んだライフストーリーワークの一例

—大好きな「家族」と「車」の写真でコラージュを作成し飾る—



ワーク
取組中

作成した
コラージュを
眺めている



利用者

- ・居室で過ごしている時、成果物を見て過ごしている姿を多く目にするようになった。
- ・支援員を居室に連れて行き、一緒にワークを見ることが多くなった。

周囲でワークの実践 を見ていた支援員

- ・ワークを見ているJさんの姿をよく目にするとう報告してもらうことが増えた。
- ・居室に滞在する時間、Jさんと一緒に写真を見る時間が増えた。

実際に関わった支援員

- ・実弟から提供された写真からよりJさんへの理解が深まった。
- ・家族・以前住んでいた場所・若い頃等Jさんへの周辺環境も知ることが出来た。
- ・Jさんが写真を見て、どう感じているかということを知ることが出来た。

過去の取り組みで確認された 知的障害者を対象にしたライフストーリーワークの効果

支援者は利用者を深く、正確に知ることに繋がる

- 過去の写真や作品、関係者の話等を通し、既存の引き継ぎ資料では見ることの少ない、過去の普段の様子や、生育史全体（あるいは特定の期間）をより深く理解することに繋がる。
- また保護者の愛情や思い、気持ちを、これまで以上に実感することができる。

ワークを見ていた周囲の支援者の利用者理解の意識に変化が生じる

- 直接ワークを行った職員と、そうではない職員とでは、新たに得られた対象者の情報量に差が生じていた断片的な情報の理解と、生育史全体的な理解につながる。
- 共有化の方法を工夫することで、よりの確に対象者の情報を理解できるようになる。

中年期、高齢期の重度知的障害者が過去を振り返ることに繋がる

- 知的障害が中程度以上の方については、懐かしんだり、過去の写真の内容を言語で表すなど当時のことを想っていると推測される反応が見られることもある。また、重度の方でも笑顔などの反応が見られることから、本人が理解しやすい方法を模索し、大切な思い出を丁寧に残しておくことが重要である。

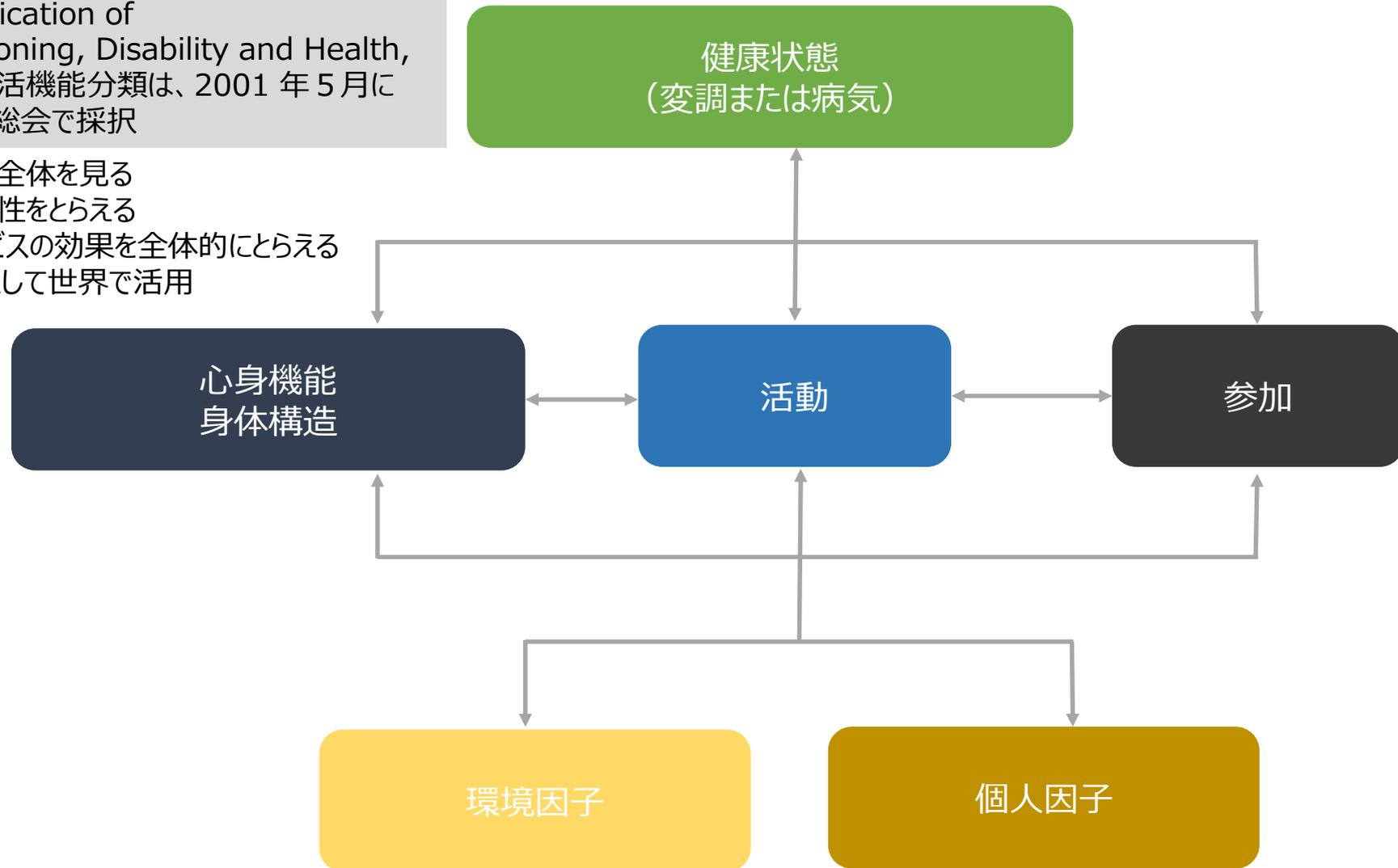


「ライフストーリーワークは、成果品を残すことにこだわらず、その過程（記録）を重んじるもの※」とされているが、知的障害者のように上手に他者に情報を伝えることが難しい人を対象とする場合、成果品があるとより多くの効果が期待できるのではないか。

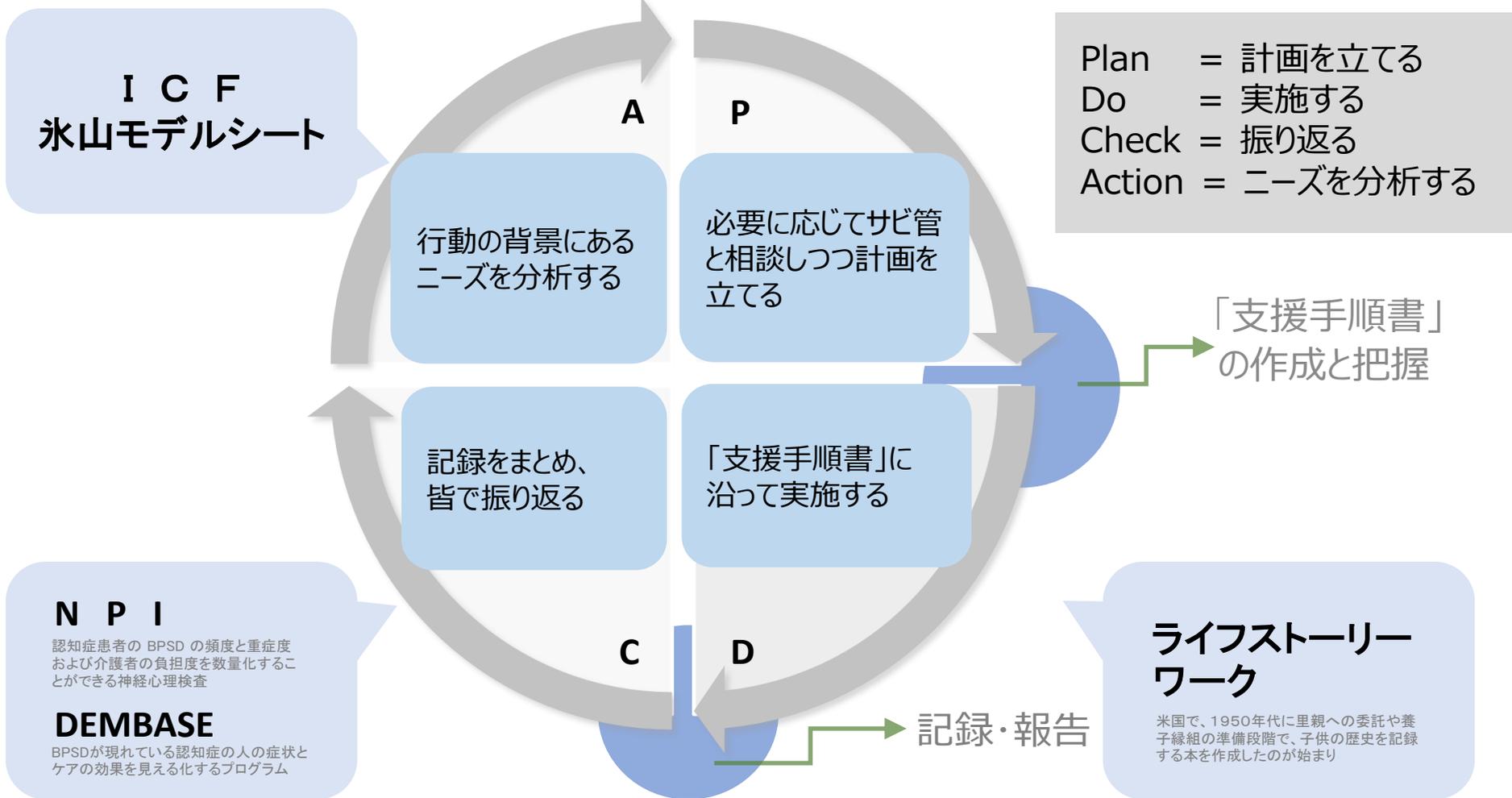
「ICF」を意識した情報収集と支援の点検

International
Classification of
Functioning, Disability and Health,
国際生活機能分類は、2001年5月に
WHO 総会で採択

※人間全体を見る
個別性をとらえる
サービスの効果を全体的にとらえる
ものとして世界で活用



「PDCAサイクル」を意識した支援の流れの構築



事例①



Aさん



男性



障害支援区分 6



初期の認知症 高血圧 前立腺肥大
神経因性膀胱 鼠径ヘルニア 視力
障害(全盲) 不完全右足ブロック

ICF で見たAさんの状態

見落としている事項はないかな？

課題となっている行動は何か？



健康状態

認知症の初期 高血圧 軽度前立腺肥大 神経因性膀胱 鼠径ヘルニア 視力障害（全盲） 不完全右足ブロック

心身機能・身体構造

- ・視力障害
- ・腰が曲がっている
- ・簡単な会話はすることが出来、意思表示も言葉で表すことが出来るが2017年に認知症の初期と診断された前後から、日中の傾眠、意欲の低下などが目立ってきた
- ・嚥下能力の低下により咽せやすい

活動

- ・屋内の移動は自力歩行。屋外では車椅子使用
- ・夜間は良く眠っているが、日中の傾眠が目立つ

参加

- ・外気浴
- ・車椅子に乗り園内散歩
- ・音楽活動
- ・DVD鑑賞

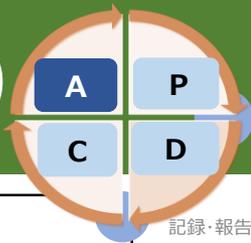
環境因子

- ・20名での集団生活
- ・食事、入浴は複数人で実施
- ・3人部屋
- ・にぎやかな環境

個人因子

- ・支援員とのコミュニケーションが好き
- ・野球観戦が好き（特に往年の読売ジャイアンツのファン）
- ・プロ野球や甲子園の中継を聴いては反応を示していたが、以前ほど興味を示さなくなった
- ・入浴が好き
- ・にぎやかな環境が苦手
- ・時々寮内で目的の場所にたどり着けず、迷ってしまうことがある

1. Action・Assessment（ニーズ分析）



課題となっている行動

- ・2017年に認知症の初期と診断された前後から、日中の傾眠や意欲、活力の低下が目立ってきた

個人因子から

(本人の特性)

- ・支援員とコミュニケーションを取ることが好き
- ・野球観戦が好き（特に往年の読売ジャイアンツのファン）
- ・プロ野球や甲子園の中継を聴いては反応を示していたが、以前ほど興味を示さなくなった
- ・入浴が好き
- ・にぎやかな環境が苦手
- ・時々寮内で目的の場所にたどり着けず、迷ってしまう

(環境・状況)

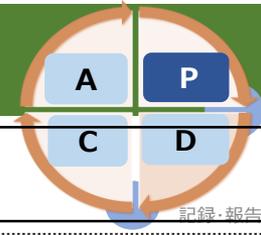
環境因子から

- ・20名での集団生活
- ・食事、入浴は複数人で実施
- ・2人部屋
- ・にぎやかな環境

必要なサポート

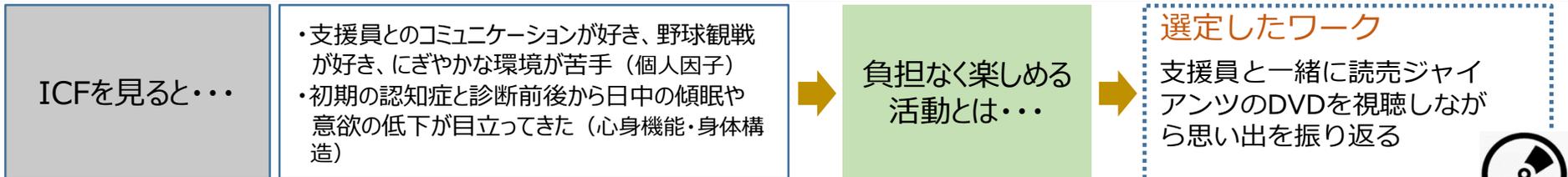
- ・余暇をなんとなく過ごしてしまっていることが多いため、わくわくするような機会を提供する

2. Plan（支援計画）の作成



必要なサポート	・わくわくするような機会を提供する
支援計画	支援方法：読売ジャイアンツの過去の映像を支援員と一緒に鑑賞し、ライフストーリーワークを実施する 支援期間 xx年10月～12月（3か月程度）

今回行ったワークの選定



取り組み方法

①情報収集

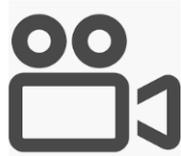
- 支援員との会話を通して、いつの時代のジャイアンツに思い出があるのか把握する
- 利用者に関わりのあった支援員からの聞き取り
- ケース記録

②ワーク方法の選定（計画）

- 読売ジャイアンツの過去の映像を準備し、支援員と一緒に視聴する
- 興味を示した場面での本人の様子（言葉、表情、身体の動きを、集中力、傾眠傾向等）を観察する

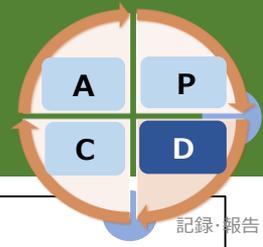
③実践

- 体調や状況に配慮しながら、ワークの実践を行う。



・日常の様子をみる

3. Do (実施)



ワークの方法

■ 読売ジャイアンツのDVDを支援員と一緒に視聴し、思い出を振り返る。

- 支援員と一緒にDVDを観ながら思い出を楽しむ。
- 時間は、10から15分程度。
- 本人の負担にならないように、様子や反応を見ながら行う。



本人の反応

- じっくりと音声に聴き入っている
- 周囲の利用者の声も聞かれているが、特に気にする様子はない
- 昭和14年から5連覇、第1次黄金時代を迎えた場面⇒手を握り締めて大きくなぞく
- 昭和19年沢村栄治が戦争に召集、台湾沖で戦死⇒「あ〜あ」と残念そうな声
- 千葉茂、別所毅彦、青田昇の回想シーン⇒笑顔で何かを話している
- 昭和33年開幕戦 長嶋茂雄VS金田正一 長嶋の4打席連続三振
⇒「あ〜」といった感じで大きくなぞく
- 昭和34年展覧試合 巨人VS阪神 4-4で迎えた9回裏、長嶋の逆転サヨナラホームラン⇒「はっ」と笑う

3. Do (実施)



- 1回目の視聴
(ダイルールのTV)

1回目の視聴

ワークの方法

■ DVDを支援員と一緒に楽しむ

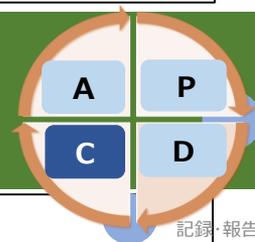
環境設定

ICFを見ると・・・

にぎやかな環境が苦手（個人因子）

- 職員室でのPCを使い視聴を予定していたが、機材トラブルによりみられず
→デイルームのTVでの視聴（周囲に他の利用者もいるにぎやかな環境）、本人用の椅子がある
- 支援員が近くに座り、Aさんの視聴の様子を見守る

4. Check（記録して振り返る）



本人の反応

- 機材トラブルによる急な場面変更にも戸惑いはない
- にぎやかな環境での視聴 → 周囲の様子を気にする素振りもないほど集中して聴き入る
- 支援員と一緒に → 往年の名場面では過去を振り返るように頷いたり、「あ～あ」と言葉を出したり、手を握り締めて力を込めていた
- しばらく視聴して、キリが良いところで終わりにしようと言葉をかけるが、「まだ観たい」と話す

支援員の気づき

- 一人でも集中して楽しむことができる
- 賑やかな環境ではあったが、周囲を気にする様子もない
- 周囲の利用者も一緒に映像を観て楽しんでいる



・2回目の視聴
(会議室の大型モニター)

2回目の視聴

ワークの方法

■ DVDを支援員と一緒に楽しむ

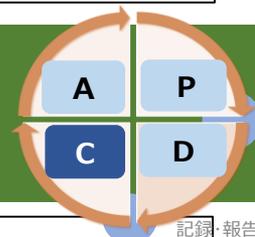
環境設定

ICFを見ると…

にぎやかな環境が苦手（個人因子）

- 会議室の大型モニターを使用し、Aさんと支援員の2人のみの静かな環境での視聴
- 建物が違うため、車椅子に乗り移動、そのまま視聴
- 支援員が近くに座り、Aさんの視聴の様子を見守る

4. Check（記録して振り返る）



本人の反応

- 静かな環境での視聴 → 周囲に物音がしないため、より没頭して聴き入っている様子
- 支援員と一緒に → 記憶にある選手の名前があがると「おー」と声を出したり、支援員との会話の中でも頷いたり、目や口を動かして反応する様子が見える
- しばらく視聴し、キリの良いところで続きはまた見ようと声をかけると、「うん、おわりね」と応え、表情も柔らかく笑顔も窺えた
- 昭和20年代の話になると、「おれがまだ小さかった頃」と話す

支援員の気づき

- にぎやかな環境より集中している様子が見られ、表情も柔和
- 支援員と会話をしながら見ることによって、より声を出したり笑顔になったり反応がみられる

4. Check (記録し振り返る)

—2回の実践を通しての振り返り—

必要な
サポート

・余暇をなんとなく過ごしてしまっていることが多いため、わくわくするような機会を提供する



ライフストーリーワークを実践した

ワークのタイミング	
8:00	朝食
10:00	日中活動
12:15	昼食
14:00	入浴
15:00	余暇 ●
17:30	夕食
20:30	就寝

ワークの場所	1回目		2回目	
	テレビモニター 画面大きい	パソコン 小さい	テレビモニター 画面大きい	パソコン 小さい
職員室 静か				
デイルーム 賑やか	○			
会議室 静か			○	
	※職員室PCの機材トラブルにより、 急遽デイルームに変更 ※デイルームには本人用の椅子がある		※賑やかな場所でも静かな場所 でも、本人の集中力は変わらない ※デイルームには本人用のくつろぎ 椅子がある	

4. Check (記録し振り返る)

—2回の実践を通しての振り返り—

本人の反応

		視聴前		視聴中		視聴後	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
わくわくする 機会の提供	本人の表情						
	言葉数	→	→	↑	↑	↑	↑
	本人の関心 (集中状況)	↑	↑	↑	↑	↑	↑
	備考				※1		
傾眠傾向 ※2		→	→	↓	↓	↓	↓

- ※1. ●映像に応じて支援員が話しかけると、嬉しそうに話をする。
●「～がホームラン打ちましたよ」→「すごい！」
●「昭和26年～が入団・・・」→「おれがまだ小さかった頃だ」
- ※2. 傾眠は一切見られず、“いきがい”に触れ意欲的に過ごせた。

APDC1巡目で、わくわくする機会の提供ができた

事例②



Bさん



男性



障害支援区分 6



脳性麻痺 巨大結腸 便秘症
前立腺炎 先天性梅毒 頸椎症
性脊椎症 腰部脊柱管狭窄症
変形性膝関節症 骨粗鬆症

ICF で見たBさんの状態

見落としている事項はないかな？

課題となっている行動は何か？



健康状態

脳性麻痺 巨大結腸 便秘症 前立腺炎 先天性梅毒
頰椎症性脊髄症 腰部脊柱管狭窄症 変形性膝関節症
骨粗鬆症

心身機能・身体構造

- ・脳性麻痺による肢体不自由 ・両手の指先を動かし物を掴むことは可能（腕の可動域は狭い）
- ・意思表示が明確 言葉による意思疎通は曖昧ながら、表情は豊か
- ・コミュニケーションを好む ・特定の支援員への依存が強い ・日中の傾眠が増えた

活動

- ・常時車椅子使用
- ・食事は一部介助 その他日常生活動作は全介助
- ・集中力が持続せず、すぐに飽きてしまう
持続時間は5分程度

参加

- ・支援員との会話
- ・外気浴
- ・カラオケ
- ・DVD鑑賞（釣りバカ日誌、男はつらいよ、ドリフターズ）
- ・機能訓練
- ・音楽活動

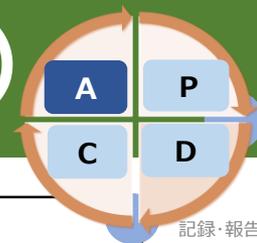
環境因子

- ・24名での集団生活
- ・食事、入浴は複数人で実施
- ・デイルームと食堂が一体化
- ・一部の利用者以外は高齢者
- ・利用者同士のコミュニケーションはほとんどない
- ・比較的静かな環境 ・4人部屋
- ・支援員がいつも近くにいる

個人因子

- ・他者とのコミュニケーションを好む 特に関わりの中で一緒に何かに取り組むことが好き 意思表示が明確で表情豊か
- ・地域の発表会に参加した当時の動画が豊富に残っている
- ・創作活動の作品や過去の写真が多く残っている ・昭和の映画を好む ・無為な時間や思い通りにいかないと情緒不安になりがち
- ・歌謡曲、童謡等が好きで歌詞も覚えている ・日中の傾眠が増えた
- ・覚醒しきらないことが増え、返事も曖昧なことが多くコミュニケーションの機会が減った ・食事の咽せが増えた ・一人で集中することができなくなった

1. Action・Assessment (ニーズ分析)



課題となっている行動

- ・昼夜逆転傾向にあり、活動性が低下している
- ・無為な時間や思い通りにいかないことがあると情緒不安になりやすい

個人因子から

(本人の特性)

- ・他者とのコミュニケーションを好む.特に関わりの中で一緒に何かに取り組むことが好き
- ・意思表示が明確で表情豊か
- ・地域の発表会に参加した当時の動画が豊富に残っている
- ・創作活動の作品や過去の写真が多く残っている
- ・昭和の映画を好む
- ・無為な時間や思い通りにいかないと情緒不安になりがち
- ・歌謡曲、童謡等が好きで歌詞も覚えている
- ・日中の傾眠が増えた
- ・覚醒しきらないことが増え、返事も曖昧なことが多くコミュニケーションの機会が減った
- ・食事時の咽せが増えた
- ・一人で集中することができなくなった

(環境・状況)

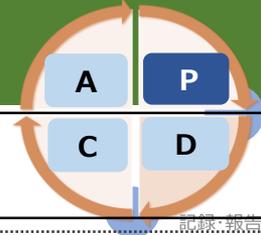
環境因子から

- ・24名での集団生活
- ・食事、入浴は複数人で実施
- ・デイルームと食堂が一体化
- ・一部の利用者以外は高齢者
- ・利用者同士のコミュニケーションはほとんどない
- ・比較的静かな環境
- ・4人部屋
- ・支援員がいつも近くにいる

必要なサポート

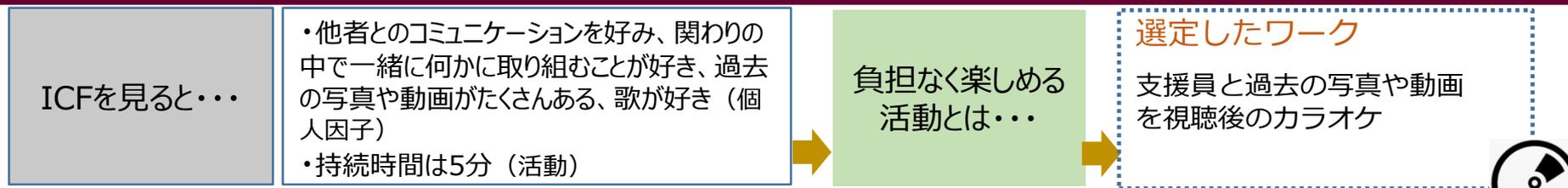
- ・わくわくするような機会を提供する

2. Plan（支援計画）の作成



必要なサポート	・わくわくするような機会を提供する
支援計画	支援方法：創作活動の作品や過去の写真を支援員と一緒に共有し、地域の発表会参加時の動画を視聴する。その後、発表会でも歌っていた曲でカラオケを行う。 支援期間 xx年10月～12月（3か月程度）

今回行ったワークの選定



取り組み方法

- #### ①情報収集
- 本人との会話
 - 地域の発表会に参加した当時の動画
 - 創作活動の作品や過去の写真
 - 利用者と関わりのあった支援員からの聞き取り
 - ケース記録

②ワーク方法の選定（計画）

- 地域の発表会の動画を視聴後、カラオケをする
- ワーク実施前に会話によるコミュニケーションで雰囲気づくり
 - 発表会当時の写真を見ながら思い出を振り返る
 - 発表会の動画を視聴
 - 発表会でもよく歌っていた歌をカラオケで歌う
- ワーク中、本人の言葉、表情、身体の動きを、集中力、傾眠傾向等を観察

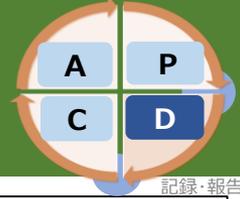
③実践

- 体調や状況に配慮しながら、ワークの実践を行う。



・日常の様子をみる

3. Do (実施)



ワークの方法

■ 当時の写真を共有しながら、音楽発表会の動画やカラオケを支援員と一緒に楽しみ思い出を振り返る

- 視聴する前に、写真を共有しながらコミュニケーションを取り、ワークに対する意欲を高める
- 支援員と一緒に動画を視聴しながら思い出を振り返り、その後カラオケを楽しむ
- 時間は5分程度
- 本人の負担にならないように、様子や反応を見ながら行う



本人の反応

- 写真を見ながら当時の思い出について会話をすると、終始嬉しそうな表情がみられる友達と共に取り組んだ音楽発表会は「楽しかった」、お昼に食べたお弁当は「美味しかった」と話す
- 動画は本人の好きな坂本九の「上を向いて歩こう」を選曲
- 動画を視聴では自身が歌っている映像や当時の雰囲気を見ながら、懐かしんでいるような表情が窺える
- 視聴中は言葉を発さず、動画に見入っている
- 視聴後には音楽のみを流しながらマイクを渡すと、真剣な表情で歌いきることが出来る

3. Do (実施)



- ・1回目の視聴(デイルーム)

1回目の視聴

ワークの方法

■ 動画やカラオケを支援員と一緒に楽しむ

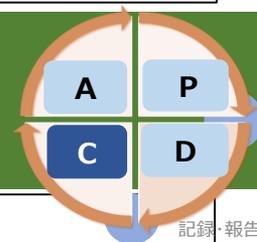
環境設定

ICFを見ると・・・

一人で集中することが出来なくなった（個人因子）

- 普段過ごしているデイルームにて、他利用者や支援員もいる賑やかな環境で実施
- TVは本人持ちのものを使用
- 支援員が近くに寄り添いBさんとコミュニケーションを取りながら見守る

4. Check（記録して振り返る）



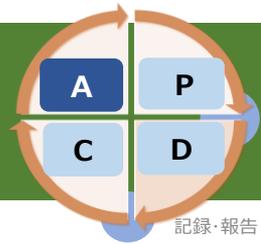
本人の反応

- 終始落ちついていて、覚醒状態も良好
- 支援員とのコミュニケーションに楽しそうな表情をみせ、発語も多く見られる
- 視聴中は言葉を発さず、動画に見入っている
- 支援員と共にカラオケを楽しんでいる様子が伺え、歌いきることが出来た
- ワーク中に周囲の利用者や支援員に意識が向くことがあり、集中力が散漫になっていた

支援員の気づき

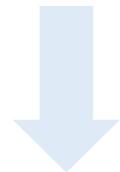
- 支援員が寄り添うことで、5分程度であれば集中して取り組む事が出来る
- 音楽を流しながら、支援員と一緒に参加することで歌詞を思い出してカラオケを歌いきることが出来る
- 周囲に利用者や支援員がいると、途中で集中力が散漫になることがあった

5. Action・Assessment (ニーズの再分析)



支援結果

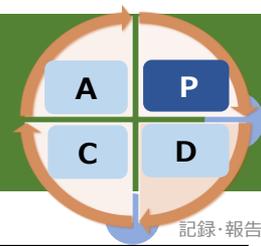
- 支援員とのコミュニケーションを好むため、コミュニケーションを取った後のワークも意欲的に取り組む事が出来た
- 支援員が寄り添うことで、動画を視聴してからカラオケを歌いきるまでの5分程度集中することが出来た
- 当時の音楽発表会に参加している自分を見て、懐かしんだり感極まっているような表情を浮かべており、過去を振り返っている様子が窺えた
- 他利用者や支援員もいる賑やかな環境では集中力にかけける場面があった



集中力が
散漫になる

- 賑やかなデイルームでは無く、静かな居室の方が集中して取り組めるのではないか
- 支援員は引き続き寄り添うが、周囲に人がいないことでワークに影響はあるのか

6. Plan (再支援計画)



支援結果

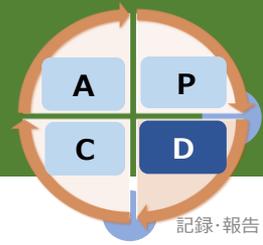
- 支援員とのコミュニケーションを好むため、コミュニケーションを取った後のワークも意欲的に取り組む事が出来た
- 支援員が寄り添うことで、動画を視聴してからカラオケを歌いきるまでの5分程度集中することが出来た
- 当時の音楽発表会に参加している自分を見て、懐かしんだり感極まっているような表情を浮かべており、過去を振り返っている様子が窺えた
- 他利用者や支援員もいる賑やかな環境では集中力にかける

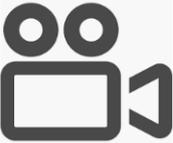


集中しての
視聴が難しい

- 賑やかなダイルームでは無く、静かな居室の方が集中して取り組めるのではないか
- 支援員は引き続き寄り添うが、周囲に人がいないことでワークに影響はあるのか
- デイルームから居室へ環境を変更して様子を見る
- 引き続き支援員は寄り添って、コミュニケーションを取りながら思い出を共有する

7. Do (実施)



 ・2回目の視聴(居室)

2回目の視聴

ワークの方法

■ 動画やカラオケを支援員と一緒に楽しむ

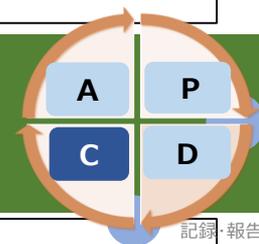
環境設定

ICFを見ると・・・

一人で集中することが出来なくなった（個人因子）

- 静かな居室にてパーテーションを使用し、ワークに集中出来るような環境で実施
- TVは本人持ちのものを使用
- 支援員が近くに寄り添いBさんとコミュニケーションを取りながら見守る

8. Check（記録して振り返る）



本人の反応

- 静かな環境においても終始落ち着いていて、覚醒状態も良好
- 支援員とのコミュニケーションに楽しそうな表情をみせ、発語も多く見られる
- 視聴中は言葉を発さず、動画に見入っている
- 居室にてパーテーションを使用することで、周囲に気を取られること無く取り組めた
- 支援員と共にカラオケを楽しんでいる様子が伺え、歌詞を思い出して歌いきることが出来た

支援員の気づき

- 静かな環境の方が、集中力が途切れること無く取り組めた
- 支援員と一緒に共有する、一緒に楽しむことがBさんの活動意欲の向上に繋がった
- 当時の様子やBさんの生きがい、歌詞を思い出して歌いきる等、普段は気づかない新たな一面を発見することが出来た

8. Check (記録し振り返る)

—2回の実践を通しての振り返り—

必要な
サポート

- ・ わくわくするような機会を提供する



ライフストーリーワークを実践した

ワークのタイミング	
8:00	朝食
10:00	日中活動
12:15	昼食
14:00	入浴
15:00	余暇 ●
17:30	夕食
20:30	就寝

ワークの場所	1回目		2回目	
	テレビモニター 画面大きい	パソコン 小さい	テレビモニター 画面大きい	パソコン 小さい
ダイルーム 賑やか	○			
居室 静か			○	
	※周囲の利用者や支援員に意識が 向いてしまうことがあった		※静かな環境においても終始落ち ついており、覚醒状態も良好 ※意識が周囲に向くことが無くなり、 集中力は向上した	

8. Check (記録し振り返る)

—2回の実践を通しての振り返り—

本人の反応

		視聴前		視聴中		視聴後	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
わくわくする 機会の提供	本人の表情	😊	😊	😐	😐	😊	😊
	言葉数	↑	↑	→	→	↑	↑
	本人の関心 (集中状況)	→	↑	→	↑	→	↑
	備考						
傾眠傾向 ※1		→	→	↓	↓	↓	↓

※1. ワーク中は覚醒状態良好で、傾眠すること無く取り組み、思い出を振り返ることが出来た。

APDC2巡目で、よりわくわくする機会の提供ができた



ライフストーリーワークは、その人の生きる意欲を高めるだけで無く、過去の記録や実践を通して支援者側の新たな支援方法の発見に繋がった。

今後も最善の支援のためAPDCを繰り返しながら、一人ひとりの「生きてきた証」を積み重ねていきたい。

最後に・・・

- ・ **ライフストーリーワーク**を行う上で大切なこと
 - ・ -日常の状態でも生活上の支障は無いように見えても...-
 - ・ ■ 生活を豊かにすることの大切さ、生きがいに触れる
 - ・ ■ 積み重ねること
 - ・ ■ なるべく早い時期から取り組むこと(引継ぎ書にもなる)
 - ・ ■ 過去にトラウマを抱えているような人には向かない可能性もある
- ・ **支援**する上で大切なこと
 - ・ ■ ICFで本人の状態と支援の効果を点検する
 - ・ ■ 氷山モデルシートを活用しながら、必要なサポートを分析する
 - ・ ■ 個に合わせて深く掘り下げる過程で、新たな支援の気づきに繋がる
 - ・ ■ APDCを繰り返す
 - ※Actionは、もしかしたらAssessment(アセスメント)の方が、支援現場には馴染むかもしれない

